

【小学校・中学校・義務教育学校用】

令和4年度学校評価 結果・学校関係者評価

達成度（評価）	
A	十分達成できている
B	おおむね達成できている
C	やや不十分である
D	不十分である

学校名	唐津市立東唐津小学校
1 前年度 評価結果の概要	①児童の主体的な学びのために指導方法の工夫・改善を行った結果、児童の書く力が伸び、学力状況調査で好成績を残すことができています。今後、児童の「SDGs教育」の充実のために、カリキュラムマネジメントをすすめ、校内研での共通した取組を一層充実させる。 ②「ひがしっ子」の合言葉とともに、児童の「出番・役割・承認」を充実させ自己肯定感を高めてきた結果が表れてきています。今後、特別支援教育の充実を図り、個に応じた指導・支援のさらなる実現を図る。 ③キャリア教育推進のために、様々な体験活動を充実させるとともに、キャリアパスポートを継続的に活用し、家庭と協働したキャリア教育の工夫や保護者への説明の充実にも努める。 ④業務改善・教職員の働き方改革への職員の意識が変革しつつある。今後、生み出された時間の有効活用方法を探り、職員の魅力を一層伸長する。

2 学校教育目標	<b>みんなと確かに伸びる子どもの育成</b> ひびきあうあいさつ(体力・健康・生活の向上) がんばる勉強・読書(学力の向上) しっかり仕事(生き方・キャリア教育の推進) コミュニケーション(地域連携・仲間づくりの推進)
----------	---

3 本年度の重点目標	①児童が主体的に学習や生活、学校行事等に関わる組織づくりと手立てを工夫し、児童の「知・徳・体」の向上を目指す。 ②「ひがしっ子」の合言葉のもと、児童・職員・保護者・地域が目標を共有し、連携を深めながら、児童の「知・徳・体」の向上を図る。 ③キャリア教育推進のための手立てを確立し、児童の「志」の確立と自己有用感の向上を図る。 ④個別最適な学びと協働的な学びの視点に立ったインクルーシブな特別支援教育の推進を図る。 ⑤業務改善・教職員の働き方改革による、ゆとりある教育活動の推進を図る。
------------	--

4 重点取組内容・成果指標	5 最終評価
---------------	--------

(1)共通評価項目				最終評価		学校関係者評価		主な担当者
評価項目	重点取組	成果指標 (数値目標)	具体的取組	達成度 (評価)	実施結果	評価	意見や提言	
				●学力の向上	●全職員による共通理解と共通実践 ○全教科で、自分の考えを書く活動を取り入れる。	●学力向上対策評価シートに示したマイプランの成果指標を達成した教師80%以上。 ○「自分の考えを相手に分かるように工夫して書くことができた」と肯定的な回答をする児童の割合が70%以上。	・学期ごとに校内学力向上研修会を行い、マイプランの計画・振り返りを行う。 ・授業の中で必ず1回は児童の考えを書く活動を入れる。	
●心の教育	●児童生徒が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動 ●いじめの早期発見、早期対応体制の充実 ○児童の自己肯定感を高め、自己有用感の得られる環境の充実	○道徳に関するアンケートにおいて肯定的な回答をした児童80%以上。 ○いじめ防止等(いじめの定義、いじめ防止等についての取り組み、事業対処等)について、組織的対応ができていますと回答した教師が85%以上。 ○「将来の夢や目標を持っている」について肯定的な回答をした児童(小学6年生)85%以上。	・道徳や人権・同和教育の研修を協働して行い、授業実践を深める。 ・外部講師などを積極的に招き、児童に生き様を考えさせる。 ・日頃から児童の様子をしっかりと観察したり情報交換したりする。 ・毎月アンケートを実施し、その内容を管理職や教職員が共有したりして早期発見早期対応に組織で取り組む。 ・ソーシャルスキルトレーニングの活用。 ・児童の様子を全職員で共有し、SCやSSWへスムーズにつなぐ。	A A A	・ふれあい道徳や人権教室の後の振り返りや感想でも、80%以上の児童が、学習したことを今後の自分の生活に生かそうとしていた。 ・いじめ防止等(いじめの定義、いじめ防止等についての取り組み、事業対処等)について、組織的対応ができていますと回答した教師は、90.9%であった。 ・「将来の夢や目標を持っている」について肯定的な回答をした児童(小学6年生)は89%であった。	A A A	・障害のある方を講師に招いた学習やSDGsの活動の体験、経験を通して、児童自ら「自分たちにはできることは何か」を考え、問題意識が育まれてきている。 ・校長を中心に組織的に丁寧に取り組まれている。児童一人一人に先生の目が行き届き、子どもも相談しやすい環境にある。 ・アンケート結果では、否定的な回答が一部あるため、注視する必要がある。 ・児童の様子を職員間で共有できている。アンケート結果から児童が自分が大切にされていると実感していることが分かる。職員が児童をよく褒めている成果だと思ふ。	人権・同和教育担当 生徒指導担当 教育相談担当
●健康・体づくり	●「運動習慣の改善や定着化」 ●「安全に関する資質・能力の育成」 ●「望ましい食習慣と食の自己管理能力の育成」	●授業以外で運動やスポーツを行う時間が1週間で420分以上の児童70%以上。 ●児童生徒の交通事故を0(ゼロ)にする ○「健康に食事は大切である」と考える児童85%以上。 ○朝食をとって登校する児童85%以上。	・朝ラン5分、昼休み35分、放課後20分、合計60分以上の運動を呼びかける。 ・交通安全の取り組みを行う。 ・給食指導に全職員で取り組み、マナーを守り、給食時間内完食を呼びかける。 ・生活状況調査と食に関する意識調査の実施。 ・保健だよりと給食だよりの発行。	A A A	・朝ランは90%以上が参加できている。 ・昼休み、運動場でよく体を動かしている。 ・児童クラブの児童は運動できている。運動場に遊びにくの子が増えた。 ・児童の交通事故は0件であった。 ・「健康に食は大切である」に対する肯定的な回答は100%であった。 ・朝食をとって登校する児童は93%と目標に到達したものの、前回と変化がなかった。家庭と連携した取組を考える必要がある。	A A A	・子どもが先生方と外で遊んだと楽しそうに話す。休み時間も校庭に出て元気に遊ぶ児童の姿をよく見ており、頼もしく思っている。 ・毎朝、校長が通学路に立ち、交通安全指導をしていることに地域住民は感謝している。 ・保健だよりの取組が児童の体力向上に大きく影響している。給食は子どもたちは楽しみにしている。お魚教室や稚魚放流体験など、よい食の勉強になっている。 ・取組の結果が数値で見られるよう、アンケート項目を改善する必要がある。	体育主任 給食・食育担当
●業務改善・教職員の働き方改革の推進	●業務効率化の推進と時間外勤務時間の削減 ○ICT利活用推進	●教育委員会規則に掲げる時間外在校等時間の上限の遵守。 ○授業でのICT利活用85%以上。	・時間外勤務時間の自覚と定時退勤日を週1回以上設定。 ・児童の実態や学習内容に合わせた電子黒板や一人一台タブレット端末などのICT機器の有効活用。	A B	・4月から2月末まで、時間外勤務時間の平均は約24時間であった。全ての職員が上限を順守することができた。職員に業務の効率化の意識が定着している。 ・年度末のテストが多い時期ということもあって、活用頻度の教師アンケート結果は74%と成果指標に対して不十分である。しかし、普段の授業ではICT利活用を行うことができています。	A A	・教師アンケートの結果を見ても、高水準であることは喜ばしいことである。しかし、否定的な回答も見られることから、業務負担の均等化など改善の必要性を検討してほしい。 ・授業では児童がタブレット端末を駆使し、楽しく学んでいた。学習内容に合わせて、楽しく学べるよう工夫、活用されている。 ・新たな課題が出ないか注視してほしい。	教頭 情報教育コーディネーター

(2)本年度重点的に取り組む独自評価項目				最終評価		学校関係者評価		主な担当者
評価項目	重点取組内容	成果指標 (数値目標)	具体的取組	達成度 (評価)	実施結果	評価	意見や提言	
				○表現力の育成	○書く活動の充実	○作文等の作品募集に参加したと答えた児童が80%以上。	・児童が夏の読書感想文に全員取り組む。 ・各種作品募集を紹介する。	
○「志」を高める教育	○自身の将来や夢のための身近な目標に対し、主体的に取り組む、成長しようとする姿勢を育てる。	○夢や目標を持って、学習や行事に取り組めた児童85%以上。	・学習や行事ごとにめあてを持ち、振り返りを行い、児童が自分事として取り組めるようにする。様々な体験活動を通して、志を高める。	A	・2月調査では、学習や体験活動に主体的に取り組めた児童の割合が85.4%、保護者の肯定的意見が89.5%であった。年間を通して、十分達成できている。	A	・「キャリア・パスポート」の取組は児童にとって分かりやすい。授業でも「めあて」「振り返り」の中で、自分の考えをまとめ発表する場が設けてあった。よい取り組みだと思う。	校長
○地域連携・地域を愛する人材育成	○OPTAや地域と交流する活動への積極的な参加	○交流活動で地域よさに気付き、存続させようと考えた児童85%以上。	・松原保全活動やSDGsの取組、海洋教育パイニアスクールプログラムを自分事として考えさせ、切実感や必要感を持たせる。	B	・2月の調査では、肯定的な回答が、児童で75.0%、保護者で94.7%であった。理由として感染症対策で交流の機会を縮減したことが考えられる。交流方法の工夫が必要である。	A	・SDGsや海洋教育は本校ならではだと思ふ。地元を愛する子どもが育つ取組である。 ・コロナ禍で参加機会減とは一概に言えない。広報や参加方法を検討する必要がある。	教頭

●…県共通 ○…学校独自 ◎…志を高める教育

5 総合評価・次年度への展望	①児童の主体的な学びとなるよう指導方法を工夫・改善した結果、児童の表現力が伸び、「知・徳・体」の向上へとつながった。今後、「SDGs」の研究を中心に、学習活動と児童の意識との関連を明らかにし、各教科の学びと結び付けながら取組を一層充実させる。 ②「ひがしっ子」の合言葉のもと、児童の「出番・役割・承認」を充実させ、児童の頑張りを称賞してきたことにより、児童の自己肯定感の高まりが見られた。今後、児童自らが「気付き・考え・協働する」取組へとなるよう、指導・支援の充実を図る。 ③様々な活動の「振り返り」を行う活動が、児童自身の学びの確認だけでなく、自分の長所や授業で果たした役割などの気付きにもなり、自己有用感を高めてきた。今後も、キャリア教育の一環として、児童の夢や次の目標、「志」とつながるよう、取組を継続、充実させる。 ④1人1台タブレット端末を授業に取り入れ、個別の学習状況に応じた問題に取り組ませたり、児童全体の学習意欲を喚起させたりすることができた。今後、誰もが安心して授業に参加でき、友達と協働して学ぶことができるような活用方法や指導、支援の工夫を充実させる。 ⑤業務改善・教職員の働き方改革への職員の意識は定着してきた。今後は、管理職のマネジメントの下で、職員の魅力を伸長するとともに、限られた勤務時間内に、児童への指導、支援の質をどのようにして高めるかを組織的に検討し、更なる充実を図る。
----------------	--